2024年02月26日 中日新聞 朝刊 6頁

郷土芸能に心引かれ

NPOで継承活動のリーダー
古水しおりさん(21)
(浜松市)

郷土芸能への思いを語る古水しおりさん＝浜松市で

年明けに行われた浜松市浜名区引佐町川名地区の国指定重要無形民俗文化財「川名のひよんどり」。たいまつの炎を振り回す勇壮な祭りに、市内の学生たちが出演者や裏方として活躍した。学生たちはNPO法人「わたぼうしグランドデザイン」（同市）のメンバーで、静岡文化芸術大3年の古水しおりさん(21)がリーダーを務めた。

古水さんは大学2年生の時、まちづくりに取り組む同NPOを知り、メンバーに加わった。市街地活性化や多文化共生事業など活動内容は多岐にわたるが、とくに郷土芸能の継承活動に心引かれた。

復興のシンボル

東日本大震災で被災した岩手県大船渡市の出身。壊滅的な打撃を受けたふるさとで、郷土芸能は復興のシンボルになった。剣を携え、鎮魂のために舞う「剣舞」。住民たちは流された家や仮設住宅をまわって踊り続けた。「みんなを力づける郷土芸能のパワーを知った」。ただ、地元でも後継者不足が深刻で、郷土芸能をどう継承していくかに関心を持っていた。

子どもとともに

昨年にNPOのメンバーとして参加した川名ひよんどりでは、仮面を着けて舞う「はらみの舞」に出演。人前で舞いを披露するのは初めての経験だった。「演じている最中に見た観客の皆さんの笑顔が忘れられない。お祭りを心待ちにしている人がどれだけ多いか実感しました」と振り返る。

本年度に入ってからはNPOで郷土芸能の継承活動のリーダーを任され、企画・運営の先頭に立った。

NPOは川名ひよんどりだけでなく、天竜区春野町勝坂地区の市指定無形民俗文化財「勝坂神楽」を2017年から支援している。ただ、コロナ禍で中断している間に担い手が亡くなるなどし、再開が危ぶまれていた。NPOは、これまで以上に学生たちが関わる態勢を整えて昨年10月、4年ぶりの開催を実現させた。

今年1月の川名ひよんどりに向けては、会場の舞台小屋に縦4㍍、横8㍍のシャッターアートを描くことに決めた。地元の児童たちに原案を頼み、豊かな自然の中で川名ひよんどりがにぎやかに繰り広げられるデザインに仕上げた。

子ども向けの体験会などで勝坂神楽や川名ひよんどりの魅力を伝えることも、NPOが力を入れてきた活動の一つだ。古水さんは「自分を振り返っても郷土芸能はアイデンティティーの一部になっている。次世代の継承者の子どもたちに、どんどん地元のお祭りや行事に関わってほしい」と願っていた。（小佐野慧太）

シャッターアートの完成を喜ぶ保存会とNPOのメンバー＝浜松市浜名区引佐町の福満寺薬師堂で

しずおかZ（ゼット）世代発

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています